

Title	東アジア漢学者の会
Author(s)	青山, 大介
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 23-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/58682">https://doi.org/10.18910/58682</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔研究会通信〕

## 東アジア漢学者の会

(Han Learning Scholar's Society of East Asia)

青山大介

### 一、概要と沿革

本会は、台湾各地の大学に専任の大学教員として勤務している日本人漢学研究者のうち、いわゆる「若手」と呼ばれる世代が中心となって設立した会であり、「出土文献の部」と「日本漢学の部」の二つの分科会からなる。二〇一五年七月現在、会員は以下の八名(生年順)である。

金原泰介〔台湾〕雲林科技大學漢學應用研究所助理教授／明末清初思想(經世思想、考証学、科挙)、明治期漢学

青山大介〔台湾〕南榮科技大學應用日語系助理教授

／先秦思想史(聖人概念・呂氏春秋)、經学思想史(出土文獻・安井息軒)

佐野大介〔台湾〕明道大學應用日語系助理教授／中国思想史・日本思想史(孝概念)

前川正名〔台湾〕高雄餐旅大學應用日語系助理教授／先秦兩漢儒家(諫争、忠)、日本漢文学(橋本左内、西村天囚)、道教廟調查

黒田秀教〔台湾〕明道大學應用日語系助理教授／史学思想史(近世、古代)、日本漢学史(祭祀儀礼)

大野裕司〔日本〕北海道大學大学院文学研究科専門研究員／古代思想史(術数・日書・周易)、東アジア文化交流史(術数・易学)

工藤卓司「台湾」致理科技大学応用日語系助理教授

／漢代思想（漢代諸子学・礼学）、日本近代漢学史（三礼研究）

吉田絵里「台湾」台湾大学哲学系修士課程／道家思想

本会は二〇一二年六月二十九日に台湾師範大学にて開催した第一回研究発表会（以下「会合」）を以て発足とし、以来年四回のペースで継続的に会合を開いてきた。会場は非固定で、会員が持ち回りで手配しており、多くの場合担当者の勤務校で開かれる。開催日も非固定で、学期終わり（一月と七月）と長期休み明け（三月と九月）を目処に、その都度調整して決定している。会員間の連絡にはメーリングリストを用い、会合の記録はサイト（非公開）上で共有し、刊行物は発行していない。

また合同研究を目的とした集まりではないため、共通の研究テーマなども設けていない。会員はあくまで自らの研究を進めるものとし、本会はそれをサポートしあう互助的組織として位置づけられている。本会の活動内容は、大きく次の三つである。

（A）研究発表会・論稿や新出土資料文献の積読をみ  
なで検討する。

（B）情報共有・学界動向及び研究動向、台湾の大学

事情の情報を共有する。

（C）学術交流・日台の漢学研究者・研究機関との連携をすすめる。

これらの活動は、それぞれ成果を挙げつつある。例えば、すでに幾つかの論稿が（A）を経て日台の査読誌に掲載されるに至った。本会で校訂された積読をもとに執筆され、査読誌に掲載された論文も出ている。（B）は、外国人教員という立場の者にとつて、極めて重要な活動である。例えば、科技部專題研究補助費（日本の科研費に相当）申請に関する情報を共有し、特に第七回会合では提出前の研究計画書を互いに検討しあつた。なお台湾勤務の会員は、全員、台湾の科研費を獲得した経験がある。そのほか、職場で遭遇したトラブル（解雇通知を受けた、減給された等）と対処法、台湾の制度、日常生活に関する情報の蓄積を図っている。（C）は、日本側との連携としては、台湾遊学中の日本人研究者に講演をお願いしており、第二回会合では池田光子先生（一般財団法人懷徳堂記念会研究員）、第五回では竹田健二先生（島根大学教育学部教授）にお越しいただいた。また第十三回会合では大阪大学中国哲学研究室と「国際「漢学」研究会」を合同開催した。ただし台湾側との連携は、会員の多くが台湾人主体の合同研究会に何かしら招

聘されていることもあって、個人レベルでは進んでいると言えるが、本会としての取り組みはまだなく、目下の課題である。

## 二、設立趣旨

本会設立趣旨の抜粋を以下に挙げる。なお二つの分科会「出土文献の部」と「日本漢学の部」について補足しておく。前者の背景には、台湾では中国古代思想史を論ずる際に出土資料を用いないことなど有り得ないという状況があり、後者の背後には、台湾では日本や韓国など「域外」の中国思想を研究する「国際漢学」が大きなテーマになっており、会員にも日本漢学に関する研究活動が求められているという事情がある。分科会は本会の大まかな傾向を示すに留まり、これ以外のテーマによる発表も認めている。

### 1. 本会趣旨

(本会は、)日本の課程博士制度下で学んだ漢学研究者が、出身・所属の枠を越えてゆるやかに結びつき、互いに啓発しあうための場を設けることを目的として設立された。(略)

### 2. 出土文献の部

今や出土文献に言及することなく、古代中国思想の研究論文を書くことは不可能に近い。しかし出土文献が陸續と公開される昨今、これを個人で追いかける事も困難な状態になりつつある。(略)

そこで、有志が集まり、古代中国思想史研究の立場から、先行する解読結果や研究成果を手分けして網羅的に追跡し、思想的に跡付ける研究グループを立ち上げる運びとあいなった。

本会の目標としては、年間四回の会合を開き、毎回平均して五〜七篇、年間で二〇〜三〇数篇の出土文献に目を通していききたいと考えている。

### 3. 日本漢学の部

(略)現在、国際化は益々進行し、物理的にも観念的にも世界はより近くなっているといえる。我々東アジア諸国の漢学者が、自国の漢字を研究することは、国際化の第一歩として一定の意義のある行為であろう。自国の文化を確認することは国際化に繋がりが、国際化を進める基礎は自国文化の確認にある。

こうした考えより、本会では、メンバーの持つ国際的視点を活かして日本漢学研究の発展に寄与したいと希望

し、ここに分科会として日本漢学のパートを設立する。

### 三、今後の展望

主な会員が台湾の大学に縁を食む以上、台湾の学術界に寄与せねばなるまい。また日本の大学に学恩を受けた者として、日本人研究者が海外へ飛躍する橋頭堡ともなわねばなるまい。そのために、本会の「一定水準の日本人研究者が一定数そろって台湾学界にいる」という強みをどう生かすべきか。ただ与えられた場で研究成果を出すだけでなく、自ら予算を獲得し他者に研究の場を提供する段階へ進むことを考えるべきではないか。そうした考えのもと、現在、台湾の科技部に日台合同研究計画を申請すべく、金原泰介主導で調整中である。

#### 附・活動記録

- ①二〇一二年六月二十九日 台湾師範大学  
青山…上博八 『顔淵問於孔子』 釈読、工藤…上博四  
『内礼』 釈読、佐野…上博四 『昭王毀室』 釈読、大野…卓陽漢簡 『周易』 釈読、吉田…郭店楚簡 『太一生水』 の問題点
- ②二〇一二年九月二二日 明道大学



第13回会合ならびに「国際「漢学」 研討会」(2015年3月7日・致理科技大学)

池田・中井履軒『論語逢原』の「知者」解釈に見られる元学の影響、工藤・『史記』『淮南子』中の豫讓復讐物語、大野・陳元靚『上官拜命玉曆』について／宋代術数学（扶日術）の特色を探る、黒田・清華大学蔵戦国竹簡（弑）「繫年」（第一章～第八章）釈読、佐野・上博四「昭王毀室」釈読その二、青山・上博八「子道餓」釈読

③二〇一三年一月十二日 高雄養旅大学

前川・郭店楚簡「魯穆公問子思」、黒田・清華大学蔵戦国竹簡（弑）「繫年」（第九章～第二十四章）釈読及び「国語」成立に関する小考、佐野・上博四「昭王毀室」釈読その三、青山・上海博物館蔵戦国楚竹簡（五）「鬼神之明」釈読

④二〇一三年四月二七日 致理科技大学

吉田・老子四十一章の再検討／老子における「上」字の用例、工藤・『上海博物館蔵戦国楚竹簡（九）、邦人不称』釈読、黒田・清華大学蔵戦国竹簡（参）「良臣」釈読、大野・上海博物館蔵戦国楚竹簡『卜書』訳注、青山・『清華大学蔵戦国竹簡（参）・説命上』釈読

⑤二〇一三年七月二六日 致理科技大学

竹田・出土竹簡の背面に見える劃線と竹節の痕跡とについて／清華簡『繫年』と北京大学所蔵漢簡本『老

子』を中心、青山・『清華大学蔵戦国竹簡（参）・説命中』釈読、大野・術数の歴史の変遷に関する考察／新出土資料、敦煌遺書・伝世文献を用いて、黒田・日本近世における中国古礼の活用と挫折／中井履軒『服忌図』『深衣図解』を中心にして

⑥二〇一三年十月五日 南栄科技大学

佐野・孝行譚における「乳」、青山・『清華大学蔵戦国竹簡（参）・説命下』釈読

⑦二〇一三年十二月十五日 雲林科技大学

※「国科会專題研究補助費」対策

⑧二〇一四年一月十一日 明道大学

黒田・上海博物館蔵戦国竹書（九）「史菑問於夫子」釈読、青山・清華簡「説命（傳説之命）」に見える「天」觀念、佐野・日中における孝の異同／「親に先立つ不孝」「異姓養子」への態度から

⑨二〇一四年三月八日 致理科技大学

金原・『左氏会箋』的校勘之特点与其定位／与『十三經注疏校勘記』的比較为中心、青山・安井息軒『書說摘要』研究序説／安井息軒の尚書関係資料、前川・保安堂初探／神になった船 第三十八号哨戒艇・楢型二等駆逐艦蓬、大野・上海楚簡『卜書』の構成とその卜法、工藤・日本近二百年『三礼』研究概況序

⑩二〇一四年七月五日 致理科技大学

青山…清華簡(三)「赤鴿集湯之屋」釈読(其他一篇)、  
黒田…日本近世における無鬼論の思想史的理解、佐  
野…孝と近親相姦、大野…『戦国秦漢出土術数文献の  
基礎的研究』出版記念講演

⑪二〇一四年九月二七日 高雄餐旅大学

金原…八股文と明末経世思想／陳子竜「詩云雨公田一  
節」を中心として、黒田…中井履軒における喪服説の  
変遷／『服忌図』『擬服図』の成立過程、前川…鳳山  
区紅毛港新廟群について、青山…安井息軒《書説適  
要》初探／以目次与校勘为中心、佐野…誕生日におけ  
る孝の系譜

⑫二〇一五年一月十七日 龍邦僑園会館(北投)

金原…試探明末幾社之思想与其影響／以陳子竜之八股  
文为中心、青山…清華簡『尹至』釈読

⑬二〇一五年三月七日 致理技術學院

※国際「漢学」研討会

⑭二〇一五年七月十一日 雲林科技大学

青山…清華簡(五)『湯処於湯丘』釈読(及其他)、黒  
田…儒者のやまとごころ／中華論より万世一系譜論  
へ、前川…現代日本楚辞研究の動向

⑮二〇一五年九月二六日 無爲草堂(台中)

工藤…岡松壘谷とその『論語講義』、佐野…和漢の忠  
孝譚における割股、青山…清華簡(五)「帝門」釈読

【附記】南榮科技大学は二〇一三年に旧称「南榮技術學院」より

改称、致理科技大学は二〇一五年に旧称「致理技術學院」よ  
り改称した。